

# 乳幼児をもつ養育者の健康管理意識を育成する支援の検討

谷口恵美子 泊 祐子 石井康子 長谷川桂子 西田倫子 宮本麻記子 松下光子 坪内美奈 (大学)  
高橋直恵 樋口千香子 三輪まゆみ 村林明子 大橋民佳 (大垣市民病院)

## I. 取り組みの過程と目的

看護師には、入院患者に対し入院環境を整え、安全対策を確実に実行する責務がある。乳幼児は自ら危険を回避する能力に乏しく、乳幼児にとっての環境の安全性は、その周囲にいる大人によって左右されるといっても過言ではない。乳幼児の入院環境では家庭とはまったく異なり、その一つにサークルベッドがある。これは床面からの70cm程度の高さがあり、ここからの転落は子どもに重大な身体的外傷を与える危険がある。しかし転落事故の報告は後を絶たず、多くの施設でその対策が検討されている。

A病棟においても同様であり、子どものベッドからの転落事故に対して平成17年度から研究的に取り組み、①転落の危険とベッド柵の必要性の説明を入院時と入院3日目に行う、②転落防止を訴えるポスターを貼り1ヶ月ごとに貼り替えるという対策を実行した。その結果、前年度と比較すると事故件数は減少した。しかし転落事故が全く無くなったわけではなく、今回共同研究として本学とともに取り組み、転落事故のケースについての検討を深めることにした。この結果により転落事故についての考察が深まるとともに、現地側の事故防止対策を検討するための一指針となることを目的とした。

## II. 方法

調査方法は次の2点が検討された。

### 1. 事故報告記録からの分析

A病棟の事故報告記録を用いて、過去に発生したベッドからの転落事故の状況について把握する方法が考えられた。しかし事故当時についての詳細な記載が無く、ここからの分析は不可能と判断した。

### 2. 養育者へのインタビュー

転落事故被害児に付き添っていた養育者を研究対象とし、事故当時の状況のほかに事故に遭ったときの思いや子どもへの安全管理についての考えを把握するインタビュー調査を行った。事故直後は養育者の気持ちが動揺していると考えられ、インタビューは事故の翌日に行うことにした。調査は現地側研究者が主体に行った。倫理的配慮として文書と口頭で研究参加は自由意志であり、

拒否しても治療やケアに影響がないことを説明した。なお本学研究倫理審査部会の承認を受けた。

## III. 調査期間ならびに調査対象者

調査期間：平成18年6月から8月まで

調査対象者：転落事故被害児の養育者6名

## IV. 結果

6件の事故での柵の使用状況は、中段までしか上げていなかった2件、中段まで上げていたがストッパーにはまっていなかった1件、柵を上げていなかった3件であった。事故発生状況は、養育者が廊下に出ていた事例が1件で、他5件は養育者はベッドサイドにいたが児から目を離したときに事故が発生していた。

このような状況に至ったときの養育者の思いは「子どもは座っていると思っていた」、「(中段まで)柵をしていたのでまさか落ちるとは思わなかった」、といった子どもの行動についての思い込み、中段まで上げている柵の安全性への過信が聞かれた。また「落ちるのは0歳くらいの子もかと思っていた」、「3歳でも油断してはいけない」と子どもの身体的発達の特徴を十分に認識していない発言がみられた。

今後どのようなことに気をつけたいかについての問いには、「柵を上段まで上げる」、「柵を上げることを徹底する」といった柵を上段まで上げることに對して意識が高まったほか、「視野から離れるときは上段まで上げる。ベッドには何も置かないほうが良い」といった具体的な対策も挙げられた。さらに看護師に対して、柵を上げることに對して更なる徹底した指導をしてほしいとの要望が聞かれた。詳細は表1のとおりである。

## V. 考察と今後の指導内容改善に向けての見解

柵は常に上げておく必要があるが、養育者が養育を行うときに自分自身のやりやすさを優先し、柵を下げることは十分考えられる。しかしほんの些細なすきに子どもが転落の危機にあるということを、養育者が認識せずに行っていた。また子どもの年齢に応じた身体的発達と、その時期に発生しやすい事故を十分認識していない養育者がいた。養育者によって子どもへの安全管理のための準備状況は異なり、日常子どもを見ているからと言って子どもの特徴を正しく認識していると

表 1 : 転落事故発生状況と付き添い者から話されたこと

	事故の発生状況	養育者が感じたこと	これからしていきたいこと	看護師への要望
A	9ヶ月 子どもはベッドの真ん中から端のほうに寄っていた。母は畳(注)の上で物を取ろうとしたため反対側を向いた。ベッド柵は中段になっていた。	子どもが立つときは、いつも座らせるようにしていたので、子どもは座っていると 思った。	柵は上段まで上げるようにしていく。	柵を上段まで上げるようにして行くこと。
B	9ヶ月 母が廊下のアルコールで手洗い中。10秒くらい。子どもは、ベッドで立っていた。柵は中段だった。ベッドの位置とか、考えていなかった。	柵をしていたので、まさか落ちるとは 思わなかった。	上段まで柵を上げる。	柵の位置について。
C	1歳5ヶ月 (自分は)ベッドの真横にいた。子どもと平行にいた。兄は頭のほうで遊んでいた。子どもは柵のそばにいた。兄が柵に寄りかかって、中段まで上げていた柵が落ちた。	柵をあげることはしていた。中段のストッパーがうまくはまっていなかった。	柵を上げることを徹底する。	柵をあげることを徹底する。
D	1歳5ヶ月 食事をするとき、いつも柵をおろしていた。子どもは食事のため、端の方にいた。母はベッド側にいたが、物を取ろうとして背を向けた。	柵を上げていなかった。	柵を上げる必要がある。	柵を上げることの説明。
E	2歳9ヶ月 母は後ろを向いていた。子どもはベッドの上で立って上下になり遊んでいた。	特になし。	視野から外れるときは、柵を上段まで上げるように習慣付けていく。布団やタオルケットの上に乗ることがあるので、ベッドの上にも何も置かないほうが良い。	柵を上げることを徹底する。
F	3歳 母はベッドのそばでいすに座り、薬をねっていた。子どもは、ベッドの端のほうで、母が薬を練っているのを見ていた。柵はしていなかった。子どもの位置については特に意識していなかった。	柵をしていなかった。ベッドから落ちるのは、0歳くらいの子ともかと思っていた。自分もそばにいたし、子どもも起きていたのでいいかと思った。	3歳でも油断してはいけない。	ベッド柵をあげる事の指導。

(注): ベッドサイドにおいてある付き添い者用の畳敷きのベッドで高さ15cmくらい。

は限らないとわかった。養育者への安全に関する指導は、このような養育者の特徴を認識した上で行う必要がある。

看護師は一日に何度も柵を操作する機会があり、柵を上げるという行為はほとんど無意識のうちに行っているだろう。しかし養育者にとっては入院して初めて経験することであり、看護師と同程度の操作の熟練を求めることは難しい。しかも事故が起こって改めて柵の重要性に気付いていることから、ベッドからの転落事故を身近な事故として捉えにくいのではないかとと思われる。転落事故と柵についての意識付けの方法を検討することが必要である。そして現在は指導についてのマニュアルがないため、看護師によって指導内容が違い、養育者の理解度が異なる原因になることも考えられる。

また実際に養育者から病院生活の苦労を伺い解決する、そして気持ちに寄り添う努力も医療者には必要ではないかと考えられた。

現地研究者からの改善策(表2)として、養育者に対して身近に転落があることを受け止められる説明を行うための「指導方法の改善」、子どもと養育者のベッドでの生活状況を見直し、彼ら

が安全に過ごすための「環境の整備」、また「事故報告記録の改善」が考えられた。そして養育者へのケアの要望を聞き取り実施する「養育者の支援」があげられた。また今後も継続して病棟全体で、方法の検討だけでなく看護師の意識の改善も含めて、事故防止について取り組むという方針が出された。

なお、これらの改善策はすでに実施が始まっている。

表 2: 現地側からの今後の改善策についての見解

・指導方法の改善
- ベッド柵自体に注意を喚起するテープを貼る。
- 指導マニュアルの作成を検討する。
- 指導内容やポスターに事故の実例を入れる。
・環境の整備
- 子どもと養育者が一緒に遊びや学習が出来る環境を整える。
- 社会資源(保育士やボランティア)の活用の検討する。
・事故報告記録の改善
・養育者への支援
- 養育者に任せることをせず看護師の意識を変える。
- 養育者へ支援を継続する。
- 現在の支援以外に希望することを養育者から毎日聞き取る。

## VI. 共同研究報告と討論の会での討議内容

討議事項に関わらず、今回の事例から考えられることを参加者と自由に討議を行った。

### 1. 親の説明の受け止めについて考えられること

養育者は入院時には子どもの病状のことで考えがっぱいで、ほとんど看護師の説明を覚えていないことが考えられる。看護師は子どもの安全のためにベッド柵の必要性を説明したつもりでも、親の頭の中では素通りしている。親が指導を徹底してほしいと要望しているのを見ると、説明したつもりでも本当につもりでしかなかったのが現実なのだということがわかる。またポスターについて親に尋ねると、意外に目に付いていないという声が多く、人によって同じものを見ているようでも認識されていないということがよくわかる。

### 2. 事故はどのようなときに起こりやすいか

子どもは元気になったところに活動性が高まり事故を起こしやすい。同時に養育者は疲労が蓄積してくる時期であるため、子どもへの安全に対して認識がおろそかになるかもしれない。

転落事故は付き添い者がいるとき発生件数が多いという報告がある。養育者がいると子どものケアで協力が得られるという利点もあるが、同時に危険が生じやすいという欠点もある。実際に付き添い者をおかない病院では、面会時間に転落事故が多い。また面会者から看護師への質問などもあり業務が煩雑になりやすく、看護師の不注意にもつながりやすい。

### 3. 看護師のケアについて

養育者が付き添っていると、子どものケアを依頼することが多い。しかしケアを通じて子どもや養育者について知ることは多くあり、養育者がいることで看護師の関わりが減少することは、看護師が得られる情報の減少につながる。

子どもの養育や精神的安定のために養育者の付き添いを認めるのならば、養育者はあくまでも子どものための存在である。そのように考えると子どもがよりよい状態であるためには、養育者も看護ケアの対象者である。

事例を見てみると、母親が与薬行為をしている場面がある。与薬時に母親の協力を求めることはあるかもしれないが、少なくとも薬を煉るとするのは与薬の準備行為であり、与薬に関する看護師の業務であると考えられる。本来の看護師の役割を見直して行くことも必要だと思われる。

### 4. 事故を未然に防ぐために

事故報告記録に詳細な記載がなく、そこからの

分析が出来なかったのは残念である。詳細があればその記録から、事故の発生時刻・子どもの症状・関わっていた人の状況などを分析し、どのようなときに事故が起こりやすいかをアセスメントすることができる。そしてその結果を養育者に返していくことによって、養育者は具体的な情報が得られ事故防止につながると考えられる。

ヒヤリハットノートが多くの病院で使われているが、事故にならなかったこともすくい上げていくことが大切である。なぜそのことが起こったのかを分析していけば、事故を防ぐための方策は見つかるはずである。報告が少ないことが良いことなのではない。ヒヤリとした事実気付く感性が高ければ高いほど、事故は未然に防ぐことが出来るのである。

### 5. 一人ひとりの認識に合わせた注意の喚起

今の母親を見ていると自分たちのイメージする母親とは違う印象がある。我々は危険だと感じる場所や物でも一人で遊ばせていたり、床を散らかしたまま走って遊ぶことを許したり、明らかに子どもに対しての危険を認知する力が弱いように見えることがある。我々にとって当たり前だと思っていることが相手も同じように感じているとは限らないということを、改めて認識しなおす必要がある。そのために親が子どもにとっての危険な環境をどのように捉えているのかを知り、その人の考えに合わせた安全についての意識付けをしていくが必要だと思われる。不注意が多いなど養育者の個別性について、一番情報を得やすいのが普段かかわっている看護師である。また子どもにも個別性があり、どんなに注意していても怪我をしやすいといった子どもが存在するのは事実である。このような情報をまず看護師が知ることが、養育者に安全についての意識を高めてもらうための第一歩となる。

安全な環境を管理するには、看護師の考える対策を実行するだけでは不完全である。何が危険であり何を守らなければならないのかという指導方法や、行動の基準を作ることは大切であるが、基準化はあくまでも安全のために最低すべきことが明らかになるということであって、すべて状況を網羅するには限界がある。子どもや養育者の状況は毎日変化しており、それに対応していく必要がある。そのことを看護師が認識して、あくまでも基準は最低やらなければならないことであり、そこに個別性や日々の状況の変化を考慮して基準を変更していかなければならない。その変更内容を判断するのが専門職の看護師としての役

割である。

しかし柵の必要性をわかっているにもかかわらず「柵を上げていると檻のような気がする」、「柵を上げると子どもと自分の間に距離距離感が生じる」という母親の声がある。看護師はそのような親としての気持ちも汲む必要があると考える。

#### **6. 看護師の責務についての意識の改善**

転落防止について説明をしたことで、患者の安全についての責任を果たしたのではない。病院内で発生した事故は医療関係者の責任が問われる。たとえば付き添い者がいない施設では、患児に起こった事故はすべて看護師の責任となるが、付き添い者がいると事故は付き添った人の責任になるのだろうか。やはり付き添いの有無に関わらず、入院患者の安全に責任を持つ我々に関する事故なのだという意識を、看護師が持つことが必要なのだと思う。養育者が付いているのに、なぜ転落するのかという意識があるとすれば、その認識を取り払うことが必要だと考えられる。

現在は子どもの入院に親が付き添う病院がほとんどになってきている。養育者が付き添うという体制で、子どもにとっての安全な環境を作っていくということは、小児看護に関わる看護師の大きな役割であり重要な課題だろう。